28

太つた砲手の荒い鼻息が聞える、石塊や砲身を打つ音も聞える。かう寂然とした中で、ばらしいしいと閑かな秋めかしい雨の音を聴きながら、濡土の香を嗅ぐと、浅ましい血腥い夢が瞬く間に覚めたやうな気がして、雨にきらめく砲身を見れば、幼い頃の事でも、初恋でもない、何かで不思議にも、ふと、ゑめやかに懐かしい想出される。

此時、遠方で一発、ドンと最初の号砲が際立って音高く鳴ると、一時寂然としたのに魅せられてゐた皆が隠れ場から這出す。

十行二十 君は去って